



やくわえ

第37号

天皇陛下御在位六十年

「奉祝 皇居勤労奉仕」

能圓坊 明彦

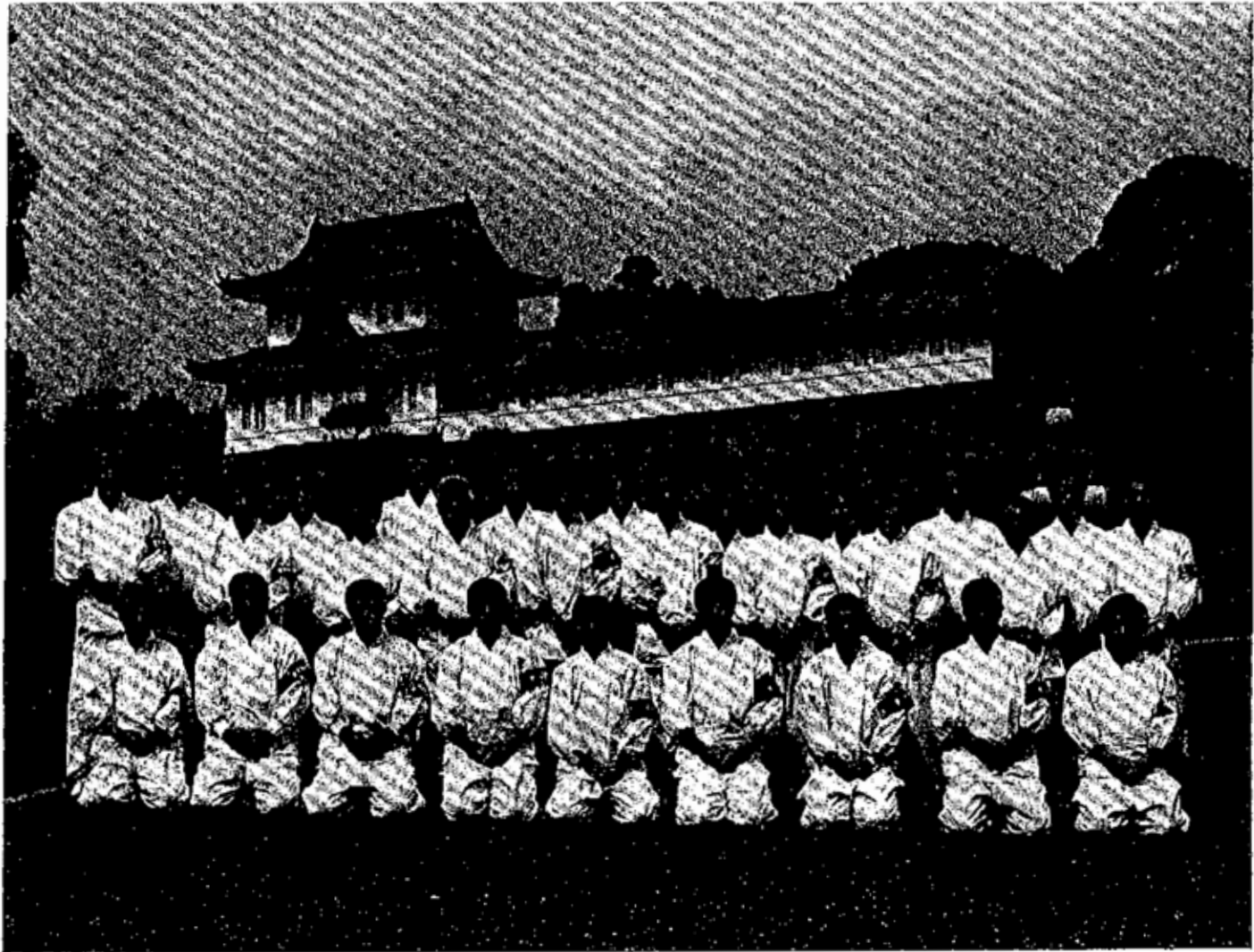
昨夏、小野会長より「御在位六十年に際し、神道青年の誠の心を以て大御心に添い奉る飾らぬ御祝いを。」との言を受け、前回五十年を知らぬ十数名の委員により実行委員会が設けられ、式典・パレード等々協議の結果、勤労により御祝いの気持ちをお伝えし、戦後教育を受けた私達が大御心を肌で体験したうえで、それを基に次なる行動へ展開するという計画であります。

この四日間は「御本殿に入る気持ち」を第一とし、服装を白衣白作業袴着用と定め、集合場所を奉仕が皇居・赤坂御用地となるため最寄りの靖国神社・都神社庁に御提供戴き、職員の方々の朝夕貴重な時間の親身な御世話と、その御神前に於ける朝拝夕拝により、一層清々しい気持ちで奉仕させて戴き、最終日の寒風の中、陛下より御会釈を賜わり、今まで幾度となく奉唱してきた国歌君が代・天皇

陛下万歳に声がでず、ただただ涙が流れ、自然と心の中で「天皇陛下おめでとうございます。」

小旗振るなかの国資オープンカーのパレード、それに対し厳戒体制で護られた自国の奉祝式典とその参列拒否者。このような残念な現状でありながら、各地各層からの勤労奉仕者に対し、その度毎に御公務御多忙の中をお出まし下さる陛下。この肌で体験した大御心が文字通り余りにも大きく未経験であったが為に、それに添った次なる展開が遅れているのが現実であります。日本国民として大変貴重で有意義な体験をさせて戴きました。

奉仕団体数は変わらずとも、その人員数が減っていると言われる現在、斯界青年会関係が年二・三団体では余りにも寂しく、修了証に囚われぬ「御在位六十年の奉祝記念で始まること」が有っても良いのではないのでしょうか。



皇居勤勞奉仕実施さるゝ

昨年の臨時總會に於て、今期運動方針に採択された、天皇陛下御在位六十年奉祝事業の一環として能圓坊実行委員長のもと、皇居勤勞奉仕が、去る三月十七日から二十日の四日間にわたり行われた。各社頭での奉賛活動の源として、参加会員三十余名は、「熱き心」を体認した。

以下日程

三月十七日(晴)赤坂御用地御奉仕

午前七時 神社庁 参集 着替

神殿前 大祓詞奏上

国家斉唱

八時半 徒歩にて出発

監理事務室で諸注意の後、園内説明を、園遊会会場となる三笠山で受ける。

十一時 皇太子、同妃両殿下、

浩宮親王殿下の御会釈を賜わる。

十一時半 三笠山下の芝踏み

午後 園内伐採木置き場へ移動し解懸作業を御奉仕する。

四時 退出

四時半 神社庁前庭 解散

十八日(晴)賢所清掃御奉仕

午前七時 靖国神社当着殿に参集、着替後直ちに拝殿外で朝拜、日程終了まで靖国神社に参拝する。

同八時 他の奉仕団と共に桔梗門より参入。窓明館に入る。

午前中 賢所前庭の御奉仕

拜礼の後、白砂の整頓、左

幄舎清掃を行い、山陵への

祭具、屏風類を移動した。

午後 倉庫その他の整理清掃

四時 退出

四時半 靖国神社の社頭で拜礼の後解散。

十九日(曇のち雨)

午前七時半 靖国神社出発

午前中 賢所の向い、天皇陛下

御生物学研究所の裏手の、

神嘗祭神饌田を拝見する。

半蔵門に至る並木道を箒、

担架などにて清掃

午後雨天の為昼食後退出する。

二十日(晴)東御苑御奉仕

午前七時半 靖国神社出発

午前中 宮内庁病院前の芝地の

土盛作業の御奉仕を行う。

午後 御苑清掃の後、御用馬を

始め園内説明があり、楽部寮では、東儀楽長から、雅

楽、楽部の説明を受ける。

三時半 天皇陛下の御会釈を賜わる。

御言葉

「勤勞奉仕有がとう。皆の元気な姿に触れ、うれしく思います。

これからも、国家・社会の為にそれぞれの立場で尽くしてくれる様希望します。体を大切に。」

続いて、聖寿の萬歳、国家の

齊唱を行った。

四時 退出

四時半 靖国神社に正式参拝し、皇居勤勞奉仕完遂を報告。

五時半 直会 於飯田橋『時代』鈴木前副庁々も出席され、靖国神社より御神酒頂き、

弥栄を祈して乾盃の後、参加者一同は、大御心の有難さに触れることのできた感激の内に、今後の奉祝活動などを話し合って散会した。

皇居勤勞奉仕に参加して

品川 宗久

東京都神道青年会では、三月十日から二十日までの四日間、天

皇陛下御在位六十年奉祝行事の一環として会員三十一名が参加し、皇居の勤勞奉仕を行った。

十七日は午前七時に神社庁に集合し、さすがに神職らしく、各自、会場で統一した白い作業衣に着替え、神殿にて大祝詞を奏上し、国歌を斉唱した後、胸ときめかむばかりに息をはずませ赤坂御用地に赴いた。

そこでは、我々の他にも秋田県の婦人会の奉仕団も参加しており、前々から勤勞奉仕を希望する者が数多くいるにもかかわらず仕事量は少なく、大した作業はないと聞いていたが、会より要望した為か、白い作業衣が一日で真黒くなってしまふほどのかなりきつい作業もあった。しかし、会員一同は共に汗水を流し作業に積極的に取り組んだ。

また、この勤勞奉仕においては、誰もが天皇陛下の御尊顔を拝し奉りたいというのが一つの夢である

と思う。

十七日午前十一時過ぎには、皇太子殿下・同妃殿下・浩宮親王殿下の御会釈を賜わることができ、小生涙含むばかりの感激の思いで胸がいっぱいであった。

十八日は賢所の御奉仕とあって、写真でしか拝することができなかつた宮中三殿を真近にして、掌典職より詳細に説明を興味深くお聞きすることもできた。

また、勤勞奉仕も終わりに近づいた二十日午後三時頃には、長くも天皇陛下の御会釈を賜わり、声高らかに聖寿萬歳・国家齊唱を行い、陛下が御退下された後も、陛下に対する深い思いと、御姿を拝することができたという感激からしばらくの間、一同は口をきけずにいた。

最後にまたこのような企画があれば是非参加したいと思うと共に、この皇居勤勞奉仕の思い出を一生の糧として、今後の奉祝活動や神明奉仕につなげていきたいと思う。



☆ザ・修行☆

みそぎ錬成会

七月十、十一日の二日間に亘り、東京都神道青年会及び東京都地方研修所の主催による禊錬成研修会が、道彦齊藤成徳先生、助彦齊藤直考先生の御指導のもとで開催された。



開講式の後、道彦先生より、禊の心得について諸注意を受け、さっさく、霊山御岳山の頂きより流れる御滝で一回目の禊が行われた。夜には、講師をお願い申し上げた神社庁理事春田次男先生より、いつもと違った方法での御講話を拝聴し、一同深い感銘を受けた。翌早朝も予定通り二回目の御滝行事。例年に比べはるかに長時間の行に苦痛を感じた者も少なくなかったが、その分充実したものであった。食事は御承知の如く、おかげだけだが、一年に一度、おかげがこんなにもおいしいと思える貴重な体験である。

今回初めて御岳山に於ての禊錬成に参加致しました。滝での禊は初めてであり、普段これと言った運動もしておらず、いくらかの不安がありました。

開講式に続きさっさくの御滝である。滝までのかけ足と、滝辺での鳥船で体はだいぶ温まり、気合も十分入ったところで第一歩を踏み入れる。やはり冷たい。滝つぼに近づき、腰をかがめ両手を強く握りしめ「祓戸の大神」と大声で唱えようにも声が出ず、しばらくの間は滝のしぶきを浴びながら震えるだけであった。次第に体も慣れてきて、震えもいくらかおさまり、何とか声も出る様になって来た。滝から上る時には下半身に力が入らず、よろめきながらやっとの思いで岸にたどりついた。

次の日、目が覚めると体のあちこちに痛さを感じる。さっさく滝での禊、昨日程の冷たさは感じずいくらか禊に近づいた様だ。

今回の錬成、普段何のけじめもなく過している私にとっては、本当に良い二日間であった。又来年も水砂糖をなめに来たい。

初めて参加してノ

初めて参加してノ

この神職錬成禊行に始めて参加させて頂き、まず始めに感じました事は、大変密度の濃い、厳しいものだという事でした。そして一人一人のやる気がひしひしと感じてくる中で二日間過ごせました事で大変貴重な経験となりました。

学生時代の禊と全く違うので、体力的に少しまいりましたが、そこは常日頃社頭で鍛えた精神力がものを言ったと思っております。

この禊行のメイン・テーマの御滝は、朝は苦にならず入れたのですが、前日の一回目の御滝は初めてのせい、仲々入りにくいものでした。しかし、こんなにも朝の冷たい空気の中で御滝に打たれる事が気持ち良いものだと思っていま sense でした。この禊行を通して、自然の中のきれいな空気を胸一杯すって、身のひきしまる様な冷たい川の水に入って、より一層清潔な心身となって今後の社頭に生かして行きたいと思う次第です。

二回目参加して！

前回始めて参加させて頂いた時は、どの様な事をやるかもわからず不安がありました。今回は二回目という事で、だいたいの日程はわかっていました。前回の御滝行事の時は、夏なので水に入る位はたいした事はないと安易な気持ちで参加した様なところがありました。今回は水の冷たさも十分承知の上で御滝行事に入りましたが、やはり水はとて冷たかったです。しかし始めての時よりもガマンがきく様な気がしました。やはり精神的な面が大きく作用する様な気がしました。

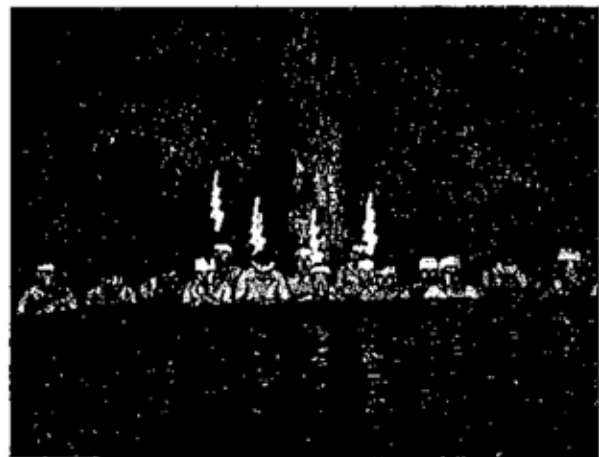


三回目参加して！

今回で三回目になる。体調が思わしくなかった。最後まで出ないかも知れないという不安があったが、どうにか無事終了できホッとしました。

若い人の足を引張らない様にと心がけたつもりである。身心の不浄がどこまで祓われ、清らかな身心に近づく事が出来たか明らかではないが、自分としては精一杯やったので清々しい気持である。

毎回思う事の一つは、もっと多くの人が参加すれば……という事である。東京の神職の何多にも満たないのは淋しい。



久し振りに参加して！

今回は久し振りの参加となりましたが、一番初めに参加した時（十二年前）と違って、体力は衰える、体重は増えるで、今回程キツかった事は曾てなかった事である。いかに日常の生活でナマケているかつくづく感じた。良く良く考えてみると、最近は車生活に慣れ、歩く事が少なくなってきた。これも一つの業と考え、今後少しでも多くの機会をとらえ、歩く事を心がけようと思う。

今回は若い方が多く、真剣で、声も良く出ていたし、素晴らしい観であったと思う。

それにしてもお滝まであんなに遠かったかなあ……。



続けて参加して！

私の様にずっと続けて参加している者は、日程・行事等を把握している。特にこれと言った感想を持ちませんが一年に一度この錬成会に参加させて頂くとやはり清々しい気持になりますし、罪けがれも祓われる様な気がします。二日間という短い期間ではあるが、禁酒禁煙・おかゆだけの食事・太鼓での行動といった規律の下、自我を捨て、一心不乱に行事する中に、神職としての心構えを再発見出来た様だ。来年も又一年間のけがれを禊に来たいと思います。



お木曳き行事に 参加して

鈴木有司

昨年より第六十一回御遷宮の諸祭、諸行事が始まっています。私たちも、六十八年をめざして、それぞれの御奉仕の心を築いていくとともに、自分たちのできることは何か考えていかなければなりません。本年五月から六月にかけては、お木曳き行事がとり行われしました。御遷宮の諸祭、諸行事のうちで、私たちが直接参加をすることができるのは、このお木曳き行事とお白石持ち行事です。幸い私はこのほど、東京都氏子青年協議会の事務局として、氏子青年会の皆さんとお木曳きに参加することができました。

五月十日、神都、伊勢には全国から、四百名に近い、氏青の活動家の皆さんが集まり、東京からおよそ七十名が参加し、一日神領民として御奉仕をしました。

十日は雲一つない快晴、御奉仕に先立ってこの日は、旧例にならい浜参宮のために、二見の町に集いました。古来より、伊勢参りのおりに、二見興玉神社に参拝を

して、日頃の罪穢を祓うことになっていきます。そこで、第六十一回のお木曳きでは、奉曳に際して、浜参宮をすることになっていきます。まず、老人福祉センターにて、結団式を行いました。奉曳本部からの歓迎を受け、全国氏青協会長、神青協会長の激励の言葉をいただき、二見興玉神社へと向かいました。一般の皆さんは神社へ参拝をし、浜参宮をすませますが、今回氏青協では、氏子青年らしく身を清め御奉仕しようと、禊を実施しました。といっても、ほとんどの方が初めての体験です。三重県神青の道彦に従って、鳥船行事をすませ、海水に身を浸しました。五月とはいうものの夕暮れのことですから、水も冷たく感じられましたが、大袂を奉唱し、清々しく浜参宮をおえました。

夜には、それぞれの宿の大広間に集合し、食事をともにしながら、また、身体の中から身を清めようと？酒を交わし、他の単位会と交流を深め、あすへの英気を養いました。

翌十一日はあいにくの曇り空。ようやく、夜が明けた五時に起床。バスで内宮へ向かいました。まだ、

早朝のことですから、人影もまばらで、踏みしめる砂利の音も快く参進し、御垣内にて参拝をすませ、伊勢市内の出発地へ向かいました。お木曳き車には長い綱が二本張られ、私たちをはじめとして、各神社庁から参加された方々、神宮奉賛会の方々が御奉仕しました。奉曳といっても、単にお木車を引くだけでなく、途中では、二本の綱を道路いっぱい広げたり、もう一本の綱を引き寄せて、綱引きのように引っぱりあったりと楽しくまた、勇壮な場面もみられました。ただ引くだけならば、二、三十分で終わってしまうほどの距離ですが、木遣り唄に合わせて綱を引いたり、綱をとり合ったりとおよそ一時間半にわたって奉曳しました。途中、小雨もぱらつきましたが、大過なく外宮神域に引き入れ、万歳三唱のあと、外宮を参拝し、散会となりました。

昨年十月、神社本庁において、第二回の神青協、全氏青協合同研修会が開催され、遷宮についても話し合われました。その折、氏青の中からは、遷宮があることは承知しているがまだ、よくわからない、遷宮について知る機会が欲しい、という声がありました。神青としても、氏子の皆さんに遷宮の意義を知っていただく努力が必要でしょう。それとともに今回のお木曳きのように身をもって参加していただき、体験を通して、遷宮に近づいてもらうことも大切なことでしょう。来年もお木曳きが行われ、全氏青協では川曳きを企画しているようです。神青の皆さんも自ら体験することによって、氏子の方々に働きかけるきっかけにしてはどうでしょうか。



建国記念の日奉祝パレード

二月十一日の紀元節には、各社で厳かに紀元祭が執行され、神武建国の偉業をお称へ申し上げたが、同日、明治公園から明治神宮までの間、建国記念の日奉祝実行委員会の奉祝パレードも行われた。

神青協・神青会も奉祝実行委員のメンバーであり、パレードに協力した。早朝より神青会員が明治公園に集合し準備した。

まづ九時半から参加者代表が参列して紀元祭が執り行われ、齊主を神青協鈴木昭樹副会長が務め、齊員を神青会会員が御奉仕申し上げた。

時折小雪がちらつく肌寒い天候の中、いとも厳かな祝詞の奏上に続いて、国家・紀元節の歌を全員で斉唱、玉串拝礼の後、高らかに聖寿の万歳を三唱して祭典を終了した。

パレードは午前十時に出発、明治神宮に向かった。ポイスカウトの捧げ持つ日の丸を先頭に、将門太鼓・湯島天神太鼓・全日本鼓笛バンド連盟やポイスカウト墨田地区の鼓笛隊などが次々と行進した。

神青会員は、祭典の準備などに当ると共に、後片付け、特にパレード出発後は、公園のゴミ掃除を積極的に奉仕した。

パレードは青山通りから表参道を抜けて明治神宮へと進んだが、途中、表参道のグリーンベルトには日の丸が美しく飾られ、又表道入口に待機していた「みこし」と合流、華やかさを盛り上げた。

一方、前日の二月十日には、渋谷の東邦生命ホールに於て、建国記念の日に際してのシンポジウムが開催され、多くの神青会員が参加した。

シンポジウムは、加瀬英明氏・小堀桂一郎氏らの学識者等によって行われ、建国記念の日を迎えるに当たっての日本の国内状況などが話し合われた。三時間にわたっての討論では様々な意見が出され、参加者達との質疑応答も活発に行われた。

神青会員らは終始熱心に聞き入り、メモをとるなどした他、終了後は席を変えて、会員相互の意見などを熱心に話し合った。

神青協中央研修会

神青協の中央研修会が、二月二十六・二十七日の両日、福岡市のホテル・ニューオータニ博多で開催され、神青会からは小野会長を始め、十余名の精鋭が参加した。

神青会員は、羽田空港に集合、空路福岡入りし、「腹がへっては……」とばかりに、まずは昼食。意気盛んに研修会に臨んだ。

今年の研修会では、従来の形に加えて、「JUST・JAPAN 60」実行委員会とFM福岡の主催する「竜童組コンサート」も行われた。

開会式では、開会の辞・神宮及び皇居の遙拝に続き、国家・神道青年の歌を斉唱、敬神生活の綱領を唱和した後、主催者である九州地区を代表して、河原忠孝理事（長崎県神青会会長）が歓迎の挨拶に立った。続いて小林会長が挨拶を述べ「場所は建国の地、九州、参加人数も過去最高をもって御在位六十年の奉祝行事を行う事が出来た」と会員諸兄の協力を深謝し又、来賓の方々からも祝辞を頂いた。

定時総会

四月十六日、神社庁に於て昭和六十一年度東京都神道青年会定時総会が開催された。

小野会長の挨拶に続き議事に入り、昭和六十年事業報告並びに同決算報告・又昭和六十一年度事業計画案並びに同予算案が審議され、満場一致にて承認された。

議事終了後、御来賓の先生方より御祝辞を賜り、「美わしき山河」を合唱して閉会した。

又、総会前に、葦津泰国先生より「いま青年神職の為すべき事」と題した講演を頂いた。

一都七県野球大会

六月十二日、一都七県神社庁親善野球大会が茨城県に於て開催された。

東京チームは前日から水戸入りし、懇親会にて健闘を誓い合った。その結果、第一戦は山梨県チームに14対1の大勝、軽くウォーミングアップと言うところでした。

第二戦は前年度優勝の群馬県チームと対戦。他チームには失礼だが実質的な決勝戦。しかし又もや惜敗。群馬チームは決勝戦でも勝ち、二連覇。

第三十七回 神道青年全国協議会

一都七県関東地区総会開催さるゝ

梅雨今だ明けぬ、雨模様の中、七月十六日、神田神社・明神会館に於て、第三十七回神道青年全国協議会・一都七県関東地区総会が東京都神道青年会を当番として開催された。

当日、東京都神道青年会会員は朝九時半に明神会館に集合し、準備万端、相整へ各県からの同志の来訪を迎えた。

一時、神田神社大前にて正式参拝の後、一時半より第一部総会に入った。総会では東京都神社庁猿渡盛文庁長の御臨席を賜り、次の通り進行了した。

一、開会の辞



- 一、神宮・皇居遙拝
 - 一、国歌斉唱
 - 一、敬神生活の綱領唱和
 - 一、当番県会長挨拶
 - 一、神青協会会長挨拶
 - 一、来賓紹介
 - 一、来賓祝辞
 - 一、各県会長紹介
 - 一、議事
 - 一、次年度当番県挨拶
 - 一、聖寿萬歳
 - 一、閉会の辞
- 総会無事終了の後、第二部の分科会を行った。この分科会というのは、今回都神青会が初めて試みたもので、メインテーマを「教化

の工夫」とし、五つの科目に分けて分科会形式により討論会を開催する要領にした。

- 1、新興住宅に対するとりくみ
 - 2、出張祭典を通しての教化
 - 3、神社施設の活用例
 - 4、社頭奉仕を通しての教化
 - 5、組織づくりの工夫と体験
- 以上五つのテーマに分類し、各グループは一グループ十名程度にて、十グループに分かれ、グループ討議には、座長・書記・発表者を置き、各グループに同一県の会員が集中しない様にして開催した。始めはなかなか発言者も無く、互いに顔を見合わせているだけの



時間が続いたが、各グループとも座長の人選が良ろしく、上手に座を取りなせば、そこはやはり青年神職、やがて活発な意見が飛び交う様になった。時間がもっと欲しい位の熱心な討議の後、国学院大学日本文化研究所助教授・阪本是丸先生に「まとめ」の講演をお願いし、初めての試みとしては大成功のうち第二部を終了した。

第三部懇親会に入っては、「将門太鼓」にてにぎやかな幕開け、神田神社大鳥居信史権宮司の音頭により乾盃の後懇親の輪を広げた。この席には、東京都神社庁より、庁長・副庁長・理事・監事の先生方、又諸先輩方、各外郭団体の会長様方、大勢様の御出席を頂き、盛大に行われた。

最後に一同輪になり「美わしき山河」を合唱し、一層の親睦を深めた。

昭和六十一年八月吉日
 東京都神道青年会
 東京都港区元赤坂二―二―三
 東京都神社庁内
 電話 四〇四―六五二五(代)